

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 23 日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23330199

研究課題名(和文) 低コンテクスト・高コンテクストという区別からみた認識・表現の比較文化研究

研究課題名(英文) Cross-cultural studies on cognition and representation from the view of low-context/high-context culture.

研究代表者

山 祐嗣 (Yama, Hiroshi)

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：80202373

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,500,000円、(間接経費) 4,050,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、東洋と西洋の文化差を、Hallの、西洋人の低コンテクスト・東洋人の高コンテクストという分類で説明する理論を構築することである。コンテクストとは、コミュニケーションにおいて共有される暗黙の知識である。認知的側面において、理論的に、従来の西洋人の個人主義・東洋人の集団主義という分類に基づく理論よりも、この理論が説得力があることが示された。また、弁証法的思考を材料とした研究などで検証された。この他、資源配分ルール、道徳的判断、他者の心的状態の推論において、コンテクストの重要性が示された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this project is to construct a theory based on the distinction between Westerners' low-context culture and Easterners' high-context culture (E. Hall) to explain cultural differences between Westerners and Easterners. The term context means implicit assumption shared by people in communication. It was argued that this theory is superior to the theory based on the distinction between Westerners' individualism and Easterners' collectivism to explain cultural differences in cognition. This theory was tested in the field of dialectical thinking and so on. It was also demonstrated that the concept of context is important to understand people's rule-based inference, moral judgment, and mind reading.

研究分野：心理学

科研費の分科・細目：社会心理学

キーワード：文化 思考 深層心理学

1. 研究開始当初の背景

(1) 従来、心理学における西洋と東洋の比較研究は、主として個人主義文化の西洋、集団主義文化の東洋という区分を基準として行われてきた(Triandis, 1995)。そして、自己観 (Markus & Kitayama, 1991) や認知 (Nisbett, 2003)の領域で観察される文化差を、個人主義・集団主義という枠組みで説明するというスタイルで研究が行われてきた。Markus & Kitayama (1991)は、西洋文化における独立的自己観と東洋文化における相互協調的自己観という対比を行い、また、Nisbett (2003)は、西洋人の認知は分析的であり、東洋人の認知は全体的であるという視点を導入し、分析的認知は個人主義文化で適応的であり、全体的認知は集団主義文化で適応的であると主張した。しかし、この説明には、個人主義においては分析的認知が、集団主義においては全体的認知が適応的であるとする説明の問題が残る。

(2) 本研究では、西洋の個人主義・東洋の集団主義という区分に代えて、西洋の低コンテキスト・東洋の高コンテキストという区分 (Hall, 1976)を提唱する。コンテキストとは、コミュニケーションにおいて暗黙のうちに共有されている情報である。東洋人は、この情報に依存する割合が高いとされている。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、Hall(1976)が提唱する低コンテキスト文化の西洋と高コンテキスト文化の東洋という区分によって、これまでの研究で蓄積された西洋人と東洋人の文化差を体系的かつ包括的に説明することができる理論を提唱することである。この研究は実証的というよりは思弁的・理論的な研究である。

(2) 上記の理論を、本研究では、推論、心の理論、深層表現において検証する。一般に低コンテキスト文化では、推論においてより普遍的なルールが用いられやすく、心の理論領域において、他者の心の中を推論することが促進され、深層表現領域では詩的表現が多くなると予想される。

3. 研究の方法

(1) 理論的研究においては、東洋人と西洋人の認知における文化差についての従来のデータを検討し、その差異を西洋の低コンテキスト文化・東洋の高コンテキスト文化という区別での説明を試みた。すなわち、普遍的なルールは、変化が流動的な状況で適応的であり、流動的な状況は低コンテキストを招くという仮説を提唱した。

(2) (1)で記した仮説は、推論領域、心の理論領域、深層表現領域において検証された。推論領域と心の理論領域では、実験心理学的な手法が用いられ、深層表現領域では、ナラティブの分析や神話の分析が行われた。

4. 研究成果

(1) 山祐嗣が Zakaria, N.と共同で行ったのは、過去の、認知、特に推論についての西洋人と東洋人の比較文化研究における文化差の説明を、従来の「西洋の個人主義文化・東洋の集団主義文化」という枠組み以外に、「西洋の低コンテキスト文化・東洋の高コンテキスト文化」という枠組みが可能であることを指摘した。特に、西洋人はより普遍的なルールを好むことに着目し、これは異文化との折衝が大きい環境で適応的であることを指摘し、低コンテキスト文化は、多文化的環境で生じやすいことを示した。これは理論的研究である。

(2) 山祐嗣が Zhan, B.他と共同で行った研究は、弁証法的思考についての日中英の比較文化研究である。Peng & Nisbett (1999)は、東洋人は弁証法的であるという仮説の検証のために、矛盾する 10 対の意見にどの程度同意するか、また弁証法的思考を賢明と判断するか否かが質問された。その結果、実際の弁証法的思考については東洋人が必ずしも行う傾向が強いわけではないが、弁証法を賢明とする判断は、日本人が高かった。また、中国人は高校生から大学生になるときにその変化が大きく、これは中国の高校生に行われるマルクス主義教育の影響と推定された。また、日本人と中国人の差異について、従来の西洋の個人主義・東洋の集団主義というよりも、日本の文化は中国のものよりもより高コンテキスト(たとえば、日本語は主語をコンテキストで推論させるという点で高コンテキストである)であるという説明が用いられた。

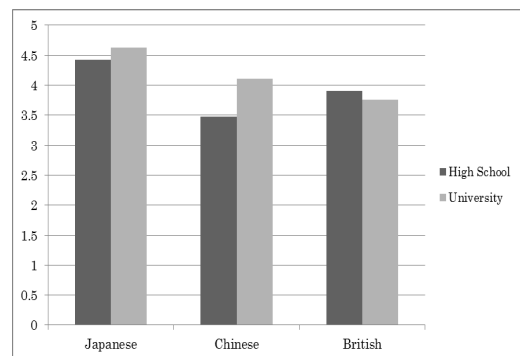


図 1. 弁証法賢明性判断の3カ国比較

(3) 平石界は社会的なルールにかんする義務論的推論について検討した。集団内での資源分配ルール (Hiraishi & Hasegawa, 2001) と、一対一の社会的交換ルール (Cosmides, 1992) について、両者の境界が曖昧である場面では資源分配ルールとしての解釈がなされ、ルールを守るためには外集団排除が必要とする推論がなされることを日本および米国の一般サンプル・データから確認した。文化差は、進化的に重要と考えられる課題においては小さい可能性を示唆するものであった。

(4) 山愛美は、『古事記』の冒頭部分の読み解きを通して、日本人の自我意識や主体性が確立する際の特徴について考察を行った。西洋の神話には初めから人格を持つ神々が登場するのに対し、『古事記』においては、具体神（イザナギ・イザナミ）が出現する前に、形をもたない神々が次々に顕われては身を隠すという長いプロセスがある。図2に示されるように、このプロセスの中に、「無」の状態から、次第に意識が生まれ、主体性が確立していく様子を読み取り、日本社会の持つ特徴 集団の中の均一性など と結びつけて論じた。

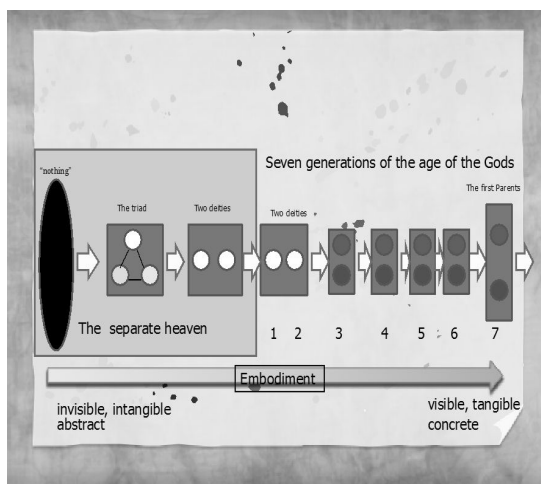


図 2. 古事記：高天原における無からの始まり

(5) 林創が行った研究は、作為と不作為の比較である。高コンテキスト文化では、お互いに情報が共有され、比較的少ない手がかりから他者の心を読むことが容易である。それゆえ、能動的な行動の抑制にも繋がる部分があると考えられる。一般に、作為と比較すると、不作為による悪事は責任が軽いと判断されやすいが、能動性があまり必要ではない高コンテキスト文化の東洋ではさらに軽くなる可能性がある。そこで、日本の大人と子どもを対象に、意図や生じた結果が同等になるようにコントロールした作為と不作為の状況を比較してもらった。その結果、不作為の方を道徳的により寛容に判断する傾向が追認され、しかもその傾向には大人と子どもで差がなかった。このことは、高コンテキスト文化では、子どもの頃から不作為に対する寛容性が強く生じやすいことを示唆すると考えられる。

(6) 誤信念課題は、他者の主体的な欲求からその心的状態を推測するという前提に基づいて構成されている。そのため、社会的な文脈が課題成績に影響を与えることは想定されていない。そこで、郷式徹は、文脈を単純化した低コンテキストな課題と課題に回答する際には無視し得る文脈を加えた高コンテキストな課題を比較することで、文脈によ

る違いが見られるかを検討した。その結果、成人の誤信念の推測に対して文脈、特に常識的な知識が強く影響することが示された。

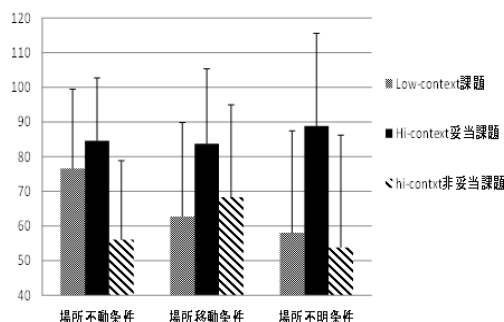


図 3. 課題および条件ごとの正しい答へ配られた割合 (%)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 17 件)

Nakamura, H., Yama, H., Brase, G. L., Zakaria, Nasriah, Arai, Y., Zakaria, Norhayati, Mohd Yusof, S. A., & Kawaguchi, J. Postal addresses as an essay of cultural cognition. *International Journal of Creativity and Problem Solving*. 査読有印刷中

佐渡忠洋、坂本佳織、岸本寛史、個別法と集団法のバウムテストにおける幹表面の表現の比較、臨床心理学、査読有、14、2014、256-263.

岸本寛史、もう一つのカルテ、N:ナラティブとケア、査読無、5、2014、69-74.

郷式 徹、他者の心の状態についての表象の形式：心的表象を命題表象と考えることの問題点、龍谷大学論集、査読無、483、2014、77-94.

山 愛美、村上春樹の創作過程についての覚書(3) デレク・ハートフィールドを巡る在と不在のテーマ、京都学園大学『人間文化研究』、査読無、31、2013、39-60.

Adachi, K., Yama, H., Van der Henst, J-B., Mercier, H., Karasawa, M., & Kawasaki, Y. Culture, ambiguity aversion and choice in probability judgments. *International Journal of Creativity and Problem Solving*. 査読有 23, 2013, 63-78.

郷式 徹、「心の理論」と実行機能、発達、査読無、135、2013、36-41.

林 創、児童期の「心の理論」—大人へとつながる時期の教育的視点をふまえて、発達、査読無、135、2013、23-29.

岸本寛史、緩和医療における時間、こころと文化、査読無、12、2013、31-37.

山 祐嗣、推論、児童心理学の進歩、査読有、52、2013、27-53.

山 愛美、村上春樹の創作過程についての覚書(2) はじめての物語としての『風の歌を聴け』、京都学 園大学『人間文化研究』、査読無、30、2013、109-119. Yama, M. Ego and consciousness in Japanese psyche: culture myth and disaster. *Journal of Analytical Psychology*, 査読有 58, 2013, 52-72.

山 愛美、村上春樹の創作過程についての覚書(1) 方法としての小説、そしてはじまりの時、京都学 園大学『人間文化研究』、査読無、29、2012、45-60.

Mercier, H., Yama, H., Kawasaki, Y., Adachi, K., & Van der Henst, J-B. Is the use of averaging in advice taking modulated by culture? *Journal of Cognition and Culture*, 査読有 12, 2012, 1-16.

山中祥子、山 祐嗣、余語真夫、女子大学生における高脂肪食品に対する潜在的態度の検討、社会心理学研究、査読有 27、2012、101-108.

岸本寛史、病うことと幸福感、最新精神医学、査読無、17、2012、323-329.

郷式 徹、林 創、心の理論、児童心理学の進歩、査読有、51、2012、51-81.

[学会発表](計 17 件)

Yama, H. Dialectical thinking: A cross-cultural study of Japanese, Chinese, and British. *Japan-France Joint Workshop on Reasoning*. (大阪市立大学) 2014年3月

郷式 徹、成人用誤信念課題に対する課題内の文脈の影響: Hi-context な状況と Low-context な状況の比較 日本発達心理学会第 25 回大会(京都大学)、2014年3月

Zhang, B., Galbraith, H., Yama, H., Wang, L., & Manktelow, K. I. Dialectic self and dialectical thinking: A cross-cultural study of Japanese, Chinese, and British. *International Symposium: Conducting Cross-Cultural, Cross-National Research in International Settings*. (Chulalongkorn, Thailand), 2014年1月

時田真美乃、平石 界、スローな心の理論であればファストな確率推論が優先に!?, 日本人間行動進化学会第 6 回大会(広島修道大学)、2013年12月

時田真美乃、平石 界、推論課題における「心の理論」の志向意識水準の操作に伴う意思決定の変化、日本認知科学会第 30 回大会(玉川大学)、2013年9月

新居佳子、山 祐嗣、因果推論における自我関与と効用。関西心理学会第 125 回大会(和歌山大学)、2013年11月

Yama, M. Haruki Murakami as modern myth maker. *International Congress: Translating Myth*. (Colchester, UK), 2013年9月

Goshiki, T. Influence of context when

Japanese children predict others' behaviors on the basis of others' mental states. 16th European conference on developmental psychology (Lausanne, Switzerland), 2013年9月

Akimoto, M., Hirao, K., Narita, K., Kanemaru, A., Yama, M., & Kishimoto, N. A Psychotherapy for an elderly woman with right prefrontal damage: the roles of image in neuropsychanalysis. *The 14th International Neuropsychanalysis Congress*. (Cape Town, SA), 2013年8月.

Yama, M. Perspectives in dream and traditional Japanese art. *The 30th Annual Conference of International Association of Studies of Dreams*. (Virginia Beach, USA), 2013年6月

Kishimoto, N. Boundary in the Tree Test and Dream Recall. *The 30th Annual Conference of the International Association for the Study of Dreams*. (Virginia Beach, USA), 2013年6月

Yama, H. Culture and inference: Rule-based inference and/or dialectical inference. *Osaka City University - University of Illinois Symposium*, (University of Illinois, USA), 2013年3月

平石 界、集団の論理は交換の論理(だけ)を上書きするか? 4枚カード問題を用いた検討、日本人間行動進化学会第 5 回大会(東京大学)、2012年12月

山口千晶、山 祐嗣、現実世界状況法によるパーソナル・スペースの測定。日本社会心理学会第 53 回大会(筑波大学)、2012年11月

Yama, H. & Zakaria, N. Inference and culture: A possible explanation by the distinction between low context culture and high context culture for cultural differences in cognition. *34th Annual Meeting of the Cognitive Science Society*, (札幌), 2012年8月

Yama, H. When and where is critical thinking needed? *6th International Conference on Thinking*. (Birkbeck, UK), 2012年7月

川崎弥生、巖島行雄、山 祐嗣、実際の記憶と虚記憶とに自己選択効果と遅延時間とが与える影響。日本認知心理学会第 10 回大会(岡山大学)、2012年6月

林 創、児童期における不作為バイアスと意図の強さ、日本発達心理学会第 23 回大会(名古屋国際会議場)、2012年3月

Hiraishi, K. Inference from a Social Brain Point of view、日本心理学会第 75 回大会(日本大学)、2011年9月

Hiraishi, K. Reasoning from two biological points of view: Evolutionary psychology

and behavioral genetics、*Lancaster-Kyoto Joint International Symposium: Towards an empirical understanding of cultural, social and evolutionary perspectives in psychological science* (Lancaster University) 2011年9月15日

〔図書〕(計6件)

岸本寛史、山 愛美 他、誠信書房、臨床風景構成法、2013、3 - 24(岸本寛史) 163 - 182(岸本寛史) 223-254(山愛美)
林 創 他、ナカニシヤ出版、嘘の心理学、2013、83-93
林 創 他、金子書房、他者とかかわる心の発達心理学、2012、75-91
山 祐嗣 他、東京大学出版会、発達科学入門[3]青年期～後期高齢期、2012、3-16
山 祐嗣 他、有斐閣、批判的思考力を育む一学士力と社会人基礎力の基盤形成、2011、66 - 86
岸本寛史、山 愛美 他、誠信書房、臨床バウム—治療的媒体としてのバウムテスト、2011、11 - 27(山愛美) 227 - 240(岸本寛史)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

山 祐嗣 (YAMA, Hiroshi)
大阪市立大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：80202373

(2)研究分担者

平石 界 (HIRAISHI, Kai)
安田女子大学・心理学部・講師
研究者番号：50343108

(3)研究分担者

林 創 (HAYASHI, Hajimu)
神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授
研究者番号：80437178

(4)研究分担者

郷式 徹 (GOSHIKI, Toru)
龍谷大学・文学部・教授
研究者番号：40332689
(平成24年度より研究分担者)

(5)研究分担者

岸本寛史 (KISHIMOTO, Norifumi)

京都大学・医学研究科・准教授
研究者番号：90397167
(平成25年度より連携研究者)

(2)研究分担者

山 愛美 (YAMA, Megumi)
京都学園大学・人間文化学部・教授
研究者番号：00230300